

「巡礼：理想的な世界」

ディビット・モートン

『鶴林寺略縁起全』の編集者が大正十五年に「お四国は御大師様が我々に二世安楽、殊に現世安穩を得せしめんがための御誓であります」と書いた。「二世安楽」や「現世安穩」を得ることは巡礼者にとって、重要なことだと今までである程度分かっていた。しかし、今回のシンポジウム・研究集会で、四国遍路だけではなく、西国、熊野、キリスト教や韓国の巡礼において、巡礼という行為をする人はどういうことを求めているのか、彼らを支えるシステム、即ち「巡礼と救済」の関係や関連について学んだ。二日間に渡り発表された充実した内容から、次の5つのことについて述べたい。

1) 「巡礼者は癒しを求めているのか？」

今回、熊野参詣路や西国巡礼について発表があったが、同じ近畿地方にある伊勢参りの場合はどうだったのかを考えた。伊勢参りが盛んになった年、何百万人が参加したと言われているのだが、全ての参加者は「功德」、または、「現世利益」を求めていたのだろう。また、どうして伊勢参りはブームになったのだろうか。何十年のデータを見ると、西国巡礼の参加人数はあまり変わっていないのに対して、四国の場合は何倍、何十倍も増えている。その大きな原因は宣伝（プロモーション）だろう。例えば、参加者の口コミ、遍路日記、また現代社会では、メディア（例えば、テレビ、ラジオ、新聞）によって取り上げること。数年前から四国遍路を世界に宣伝して、世界遺産にしようという運動が始まって、その結果、四国遍路はどういう物かを体験したい人が増えている。しかし、皆が「癒やし」を求めてきていると思わない。この巡礼（遍路）ブームの波に乗っているだけだと思う。歩く遍路は「癒やし」を探す余裕があると思うが、現代、主に行われている竜巻のような遍路バスツアーではできないであろう。

2) 「巡礼道での平等性」

いくつかの発表の中で、様々な巡礼道では宗教、性別や健康状況に於いての差別がなく、誰でも参加できることが述べられた。私は、在日中の外国人として、こういう「平等性」のある所に大変関心がある。即ち、女性、病人、信仰心が違う人、また外国から来た人は巡礼道において地元民や他の巡礼者からどういう風に扱われているのかをもっと知りたい。古くから、地元民は女性や病人（例えば、四国遍路の場合、ハンセン病の方）の巡礼者に扶助・援助・接待を差上げたことが分かっている。私は研究の中で、外国人遍路をよくインタビューして、感想や意見を聞いている。一人は「遍路の白装束を着ると、地元の方は私を最初に遍路、次に外人として扱ってくれる」と言った。もう一人は「店に入ると、私が普段着か、白装束を着ているかによって、扱い方が違う」と言う。巡礼に参加している女性、子ども、外国人、病人に対する救済・援助、また彼らの扱われ方（例えば、身分差別）をもっと研究する価値があるだろう。

3) 「支えるネットワーク」・「旅のシステム」

今回、各巡礼に巡礼者を支えるネットワークがあることが、さらに分かった。一人で（自力で）旅するかもしれないが、その裏に地域社会の人、政府などの人や組織もその人の巡礼体験を支えているのである。多

くの場合、巡礼道添いに食べ物や宿泊などの物を提供する人や団体がいる。政府も巡礼道の維持などに参加している。しかし、巡礼者は主に他の巡礼者の援助に頼る。どうして、こんなに多くの人が巡礼者に救済を与えるのだろうか。「記録からたどる四国遍路」の発表では、いくつかの遍路に関する資料を分析することによって、遍路に対する「旅のシステム」がどれ程充実しているかが分かったし、その記録に記されている遍路が、どのような接待を受けていたのか、どのような感想を持ったのかが分かった。昔、接待を与える人はあげることによって、「功德」また、「現世利益」を得ると言われていたが、今はどうだろう？支えるネットワークがいまでも存在する。しかし、お接待をあげる動機はどのように変化しているのかを調べる価値があるだろう。

4) 「供養の巡礼」・「思い出の巡礼」

韓国における2つの悲惨な事件について初めて知って、韓国人は「無辜な死」を供養するため、またその事件を忘れないため、毎年、イベント（例えば、その土地に行く巡礼）が行われていることを学んだ。このことが世界の幾つかの国で毎年11月11日（Remembrance, Poppy, Armistice Day）に行われていることを思い出した。その日はいままで戦争でなくなった人を思い出させる日だ。家族は戦争でなくなった人の墓地に行く「供養の巡礼」に出かける。悲惨な状況でなくなった人を忘れてはいけないという想いは人間として一つの本能だろう。私の祖父も第二次世界大戦中、3年半、タイで日本軍の捕虜として、泰緬鉄道を作った一人だった。その間、祖父が密かに書いた日記が残っており、私は彼と他の捕虜が経験したことを研究している。いつか、彼がその辛い体験をした土地を訪れたいし、数万人が「無辜の死」に至った所にどうしても行きたい。私は何を求めているのだろうか？きっと、「現在安穩」だと思う。

5) 「上を向いて歩こう」

「歩くことの効用について考える」の発表はとても興味深かった。歩くことは「人間が生活を営む上で最も基盤となる行為の1つ」なのに、私たちはその細かいことを考えたこともなかっただろう。その話を聞いて、数年前、日本人学生をカナダに連れて行った時のことを思い出した。ある日、カナダ人のガイドは私たちを森の中でハイキング体験をさせた。私たちが森に入って数分後に、ガイドさんが大きい声で「皆、止まれ！下を見るな！上を見て！周りを見て！」と叫んだ。体の姿勢のため、また、周りの世界を観察するため、上を向いて歩くことがとても重要であることを更に実感した。巡礼者は「井の中の蛙、大海を知らず」の諺にある蛙と違って、自らの足で「大海」を知るために安全の地から不安、危険、知らない地に出て行く好奇心・冒険性がある。

今回のシンポジウム・研究集会では、巡礼と救済について、いくつの視点から学ぶことができ、上に述べたことについて考えさせられた。四国遍路と世界の巡礼の相違点や類似点がたくさんある中、こういう学会によって、巡礼に対するテーマの討論を更に起こさせるのはいいことだ。